

六ロ、	引	テタ、	ミハ、	上ラ	上チ、	ミハ、	タイ	テトラ	六ロ、	引	テト、	上チ、	引	トト、
テラ	。	ア	ア	テロ。	タイ	六ロ	上リ。	テ五	六ロ、	引	ミハ、	テラ	中ト、	ヲ
六	六ト、	五	テラ	五タ、	上チ	ヲ	五タ、	上チ	。	ヲ	テト、	上チ	テ	ミホ
ト	引	上	ミハ、	テラ	上チ	テロ。	テラ	上リ	。	。	五ラ、	テト、	テ	五タ
六	六ト、	五	テラ	六中ト、	上リ	テト、	ア	。	。	テロ	テロ	上ラ、	テ	テロ。
六	六ト、	五	テラ	上チ	。	五ラ	テロ	上タ、	。	テラ、	テラ、	上ラ、	引	テロ。
六	六ト、	五	テラ	上チ	。	五ラ	テロ	上タ、	。	テラ、	テラ、	上ラ、	引	テロ。
六	六ト、	五	テラ	上チ	。	五ラ	テロ	上タ、	。	テラ、	テラ、	上ラ、	引	テロ。
六	六ト、	五	テラ	上チ	。	五ラ	テロ	上タ、	。	テラ、	テラ、	上ラ、	引	テロ。
六	六ト、	五	テラ	上チ	。	五ラ	テロ	上タ、	。	テラ、	テラ、	上ラ、	引	テロ。
六	六ト、	五	テラ	上チ	。	五ラ	テロ	上タ、	。	テラ、	テラ、	上ラ、	引	テロ。
六	六ト、	五	テラ	上チ	。	五ラ	テロ	上タ、	。	テラ、	テラ、	上ラ、	引	テロ。
六	六ト、	五	テラ	上チ	。	五ラ	テロ	上タ、	。	テラ、	テラ、	上ラ、	引	テロ。
六	六ト、	五	テラ	上チ	。	五ラ	テロ	上タ、	。	テラ、	テラ、	上ラ、	引	テロ。
六	六ト、	五	テラ	上チ	。	五ラ	テロ	上タ、	。	テラ、	テラ、	上ラ、	引	テロ。
六	六ト、	五	テラ	上チ	。	五ラ	テロ	上タ、	。	テラ、	テラ、	上ラ、	引	テロ。

〔伊澤修二、希臘古樂へアポロの讃歌〕を發見した時の短歌二首

(アポロは希臘人の尊崇したる美術の神なり)

聞けアポロ

二千年余の

後の世に

調べる琴の

音やは

亂るゝ

希臘古来の四絃琴の我旋法と同じきを見て

希臘も日本も

同じこゝ路ねを

こめて伝へし

修

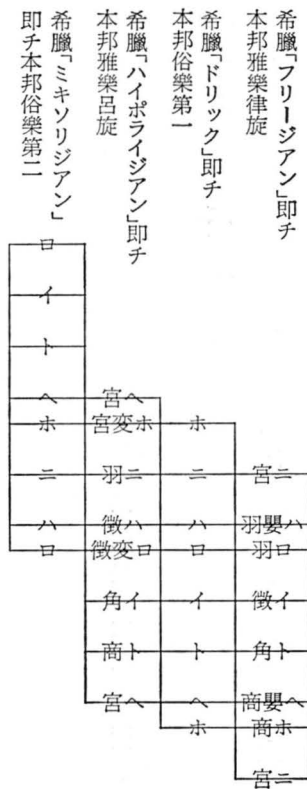
(自筆巻紙片一通、長野県上伊那郷土館蔵)

(五) 「音樂沿革大綱」

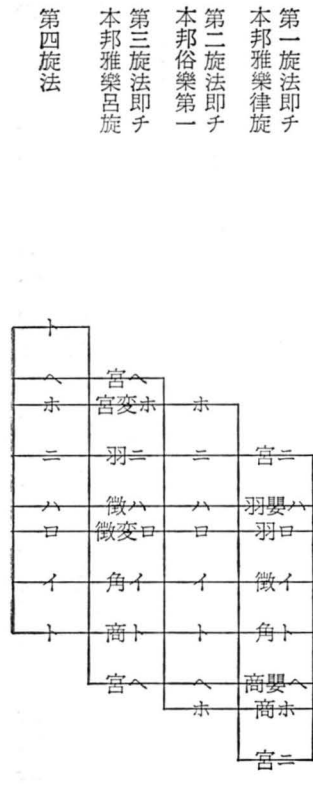
インゲルノ説ニ據ルニ歐洲ノ音樂ハ之ヲ希臘ヨリ傳ヘ希臘ハ之ヲ埃及ヨリ傳ヘ埃及ハ之ヲ印度ヨリ傳ヘタリト云ヘリ而シテ本邦ノ音樂ハ之ヲ支那ヨリ傳ヘ支那ハマタ之ヲ印度ヨリ傳ヘタリ其間多少變出轉生ニ係リ且事ノ頗ル太古ニ屬スルヲ以テ或ハ未タ直接ノ關係ヲ詳カニセザルアリトモマタ間接ノ餘流ヲ汲ムニアラザルハナシ故ニ東西ノ音樂ハ印度ヲ以テ共同ノ大源トスベシ抑印度ノ音樂ノ埃及ニ傳ハリシハ「アリヤ」種族ノ一部ガ西移ノ際ニ在リ即チ印度語ノ歐

洲ニ移植セルト同一ノ機期ニ属セリトス蓋シ埃及ノ五声音階ハ印度ノ五声音階ニシテ希臘ノ「エンハーモニックジーナス」ハマタ此埃及ヨリ傳リタル五声音階ナリ而シテ埃及ニ流行シタル最古ノ樂器ハ笛ナリ笛ハ上古「アレキザンドリア」ヨリ埃及ニ至ル地方ニ於テ貴賤尊卑ヲ問ハズ誰アリテ一人モ之ヲ吹キ得ザリシ者ナク殊ニ「クレオパトラ」ノ父モ之ヲ好ミ吹笛王ノ綽名アリトムーアノ説ニ見エタリ此笛ハ即チ印度ヨリ渡リシモノトス蓋シ笛ハ所謂五声ヲ具ヘ印度ニ於テ最モ古キ樂器ノ一ニシテ上古此樂器ノ印度ニ行ハレシハ其證ニ乏シカラズ即チ印度人ガ上古ヨリ厚ク信仰スル偶像ナル「クリシナ」ノ如キハ若年ナル吹笛者ナリ其人民ノ吹笛ヲ愛稱シタル事以テ知ルベシ抑笛ハ古今ノ稱シテ音樂ノ母トスルトコロニシテ畢竟音樂ナルモノハ一片ノ竹端ニ風氣ノ偶觸シテ音響ヲ生ゼシニ由来シ笛ハ天下万国樂器ノ始祖タル事疑ヲ容レズ故ニ今日管絃ノ演奏ニ於テモ現ニ其諸樂器ノ律ハ尽ク笛ニ由テ之ヲ調フル事一定ノ規則ニシテ其律ノ調フモ乱ル、モ皆此笛ニ由レリムーアノ説ニ拠ルニ埃及ノ音樂ノ希臘ニ傳ハリシハ埃及ノ人民ガ地中海ヲ航シテ對岸ニ渡リ今ノ希臘地方ヲ開拓セシ其日ニシテ即チ希臘開闢ノ際ニ在リ又ピサゴラスハ業ヲ埃及ノ僧侶ニ受ケ殊ニ音樂ヲ皆傳セリトモイヘリ希臘ノ「ドリアン」「フリージアン」及ビ「リジアン」ハ埃及ヨリ移シタル音階ニシテ樂器モ彼ノ笛ハ云フニ及バス其他種々之ヲ傳ヘタリ就中希臘ノ最古樂器ノ一ナル「ライル」ハ埃及直傳ノモノニシテ埃及ノ殿堂ニハ往々此樂器ヲ彫刻セルモノアリテ其證今ナホ現然タリ「ライル」ハ譯シテ立琴ト云フ其律ニ係リテハ希臘樂律ノ條ニ就テ見ルベシ倍此ノ加ク印度ノ音樂ノ埃及ヲ經テ希臘ニ傳リシハ歲月トイヒ

距離トイフモ皆非常ニシテ音階ニ至大ノ變革ヲ来スベキニ然ハナクシテ其却テ現時我邦ノ音階ト相同シキハ「アポロ」ノ讚歌發見ヲ以テモ之ヲ概知スルニ足レリ実ニ希臘ノ音階ト本邦ノ音階ト符合スルモノアルハ其證分明ナリ今ヘルムホルツ音樂論ヨリ彼數種ノ音階ヲ抄譯シテ之ヲ本邦雅俗ノ音階ニ照合シ其要ヲ示ス事左ノ如シ

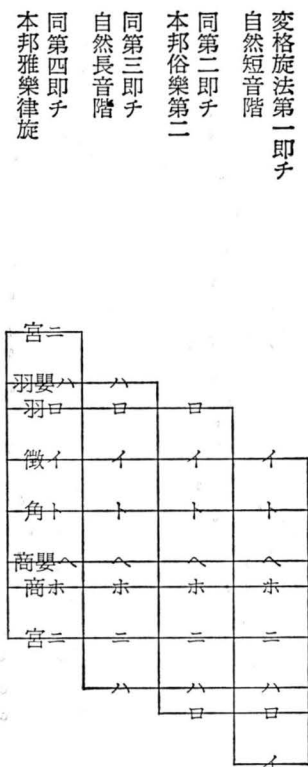


希臘ノ音樂ノ延ヘテ羅馬ニ傳ハリシハ紀元三百年代ノ終ニ在リジヨン、ハラ音樂史ニ據ルニ「ミラン」ノ教正セン、アンブロース西曆第四紀ノ終ニ方テ希臘ノ遺音ヲ採拾シ始メテ四種ノ旋法即チ四音階ヲ撰定セリ之ヲ安氏ノ旋法ト云フ其第二旋法ハ即チ希臘ノ四聲音階二個ヲ直接連合シタルモノニテ第一及ヒ第四ハ其變体ニ属シ第三



ハ稍々新種トス此四旋法中ニ於テモ三旋法ハマタ全ク本邦雅俗樂ノ音階ト符合セリ即チ左ノ如シ〔前頁下段左の図〕

後西曆第六紀ノ末ニ及ビ羅馬ニ於テ國體ト共ニ呂律モ乱レ音樂ノ衰頹ヲ致セシカバグレゴリー大法王之ヲ憂ヒセン、アンブロースノ遺業ヲ紹キ音樂ノ振興ヲ謀リシニ奈何セン其旋法ノ種類僅少ニシテ人心ヲ維持スルニ足ラザリケレバ更ニ苦考シテ四旋法ヲ撰定ス是ニ於テ安氏ノ旋法ヲ名ツケテ正格旋法トイヒ當時撰定シタルモノヲ名ツケテ変格旋法トイヘリ合セテ八旋法ヲ得タリ變格旋法ノ第一音ハ其正格旋法ノ第五音ニシテ正格旋法ノ第一音ハ其變格旋法ノ第四音ナリ此變格四旋法中ニ於テモ二旋法ハマタ全ク本邦雅俗樂音階ト符合セリ即チ第二旋法ハ俗樂音階ノ第二種ト符合シ第四旋法ハ雅樂ノ律旋ト符合ス即チ左ノ如シ



正変都合八種ノ旋法ヲ通覽スレバ本邦雅樂ノ律旋呂旋モ俗樂ノ第一種及ヒ第二種ノ音階モ皆此中ニ存在セシ事一目瞭然タリ畜ニ然ルノミナラズ樂書樂譜ノ体裁モマタ我邦ノ情態ト密ニ符合ス即チ樂譜ニ譜表モナクシテ歌詞ノ側ニ黒点ヲ附記シ以テ其曲調ノ記符ト為セ

リ其情本邦現用ノ謠本淨瑠璃本等ト一般ナリ即チジョン、ハラ音樂史ヨリ抄訳セル左ノ一例ヲ見ルベシ

「プロース、オフ、モントペリル」讚美歌名

西曆第十世紀ノ頃普通用ノモノニシテ此樂譜ノ原書ハ即チ古寫本中ニ發見スル所ナリ但シ此曲ハ彼ノ第十世紀ノ終ニ方テ流布シタル此世界ノ將ニ滅セントスルトノ妄説ノ人心ヲ蠱惑シタル際ニ成リタル樂曲ノ一部也

譜表ニ用フル線ハ第十一世紀ノ初メニギドローノ發見セル所ナリト云フ此線モ最初四線ニシテ次ニ十一線トナリシガ後之ヲ分ケテ各五線ノ二部ト為セリ今ノ五線ハ即チ是ナリ音符變等ノ如キ樂譜用ノ記號ハ尋テフランコノ發見セシトコロナリトイフ

其後羅馬ノ音樂ハ耶蘇教ト共ニ歐羅巴全洲ニ傳播セリ然レトモマタ其人物ノ輩出シタル順序及ヒ其多寡ニ就テ之ヲ考フレバ此傳播モマタ自カラ次序アルモノ、如シ蓋シ羅馬ニ次テ音樂ノ盛ンナリシハ白耳義トス白耳義ノ音樂ハ千三百年代ノ終ヨリ同四百年代ノ始ニ方リジユヘーノ振起セシトコロナリ白耳義ニ次クモノハ以太利ナリ以太利ニ於テ音樂ノ興リシハ千四百年代ノ中葉ニ方リテ白耳義音樂ノ大家ジヨスキングガ其節ヲ以太利ノ地ニ觸ル、ノ日ニ起源セリ尋テ音樂ノ日耳曼、佛蘭西、英吉利、西班牙、其他歐洲ノ各國ニ傳播セシハ皆此ジヨスキング以太利ニ養成シタル門弟子ノ業ニ出テタリ

偕彼ノ正變旋法ノ進ンデ今日ノ歐洲樂ニ至リシ所以ヲ推スニ其原由ニ種々アリ蓋シ該八旋法中(□)ニ始ルモノ(俗樂音階ノ第二種)ハ不完全第五音ヲ有シ其(△)ニ起ルモノ(雅樂呂旋)ハ三連全音ヲ存スル等ノ如ク多少ノ病患アリ特ニ主調音ノ不規則ナルハ此等ノ旋法ノ

原

譜

Audi — tollis audi mag- ni ma ri- limbus audi homo

audi omne quodcumq; sub so- le natus & prope est — dies ir- ge- fa pre

mae dies in m- sa- dies amara- qua- caelum fugiet sol erubescet

luna mutabitur — dies nigrescet — sidera supra- terram cadent-

heu miser- i heu miser- i quid homo in e- pram sequeris- laticum

譯

譜

Au- di tel- lus, au- di mag- ni ma- ris lim- bus,

au- di ho- mo, au- di om- ne quod vi- vit sub

so- le: Ve- ni - et, pro- pe est di- es

i- rae su- pre- mae, di- es in- vi- sa, di- es a- ma- ra,

qua coe- lum fu- gi - et, sol e- ru- bes- cet, lu - na

mu- ta- bi - tur, bi- es ni gres- cet, Si- de- ra

su- pra- ter- ram ca- dent Heu mi- se- ri!

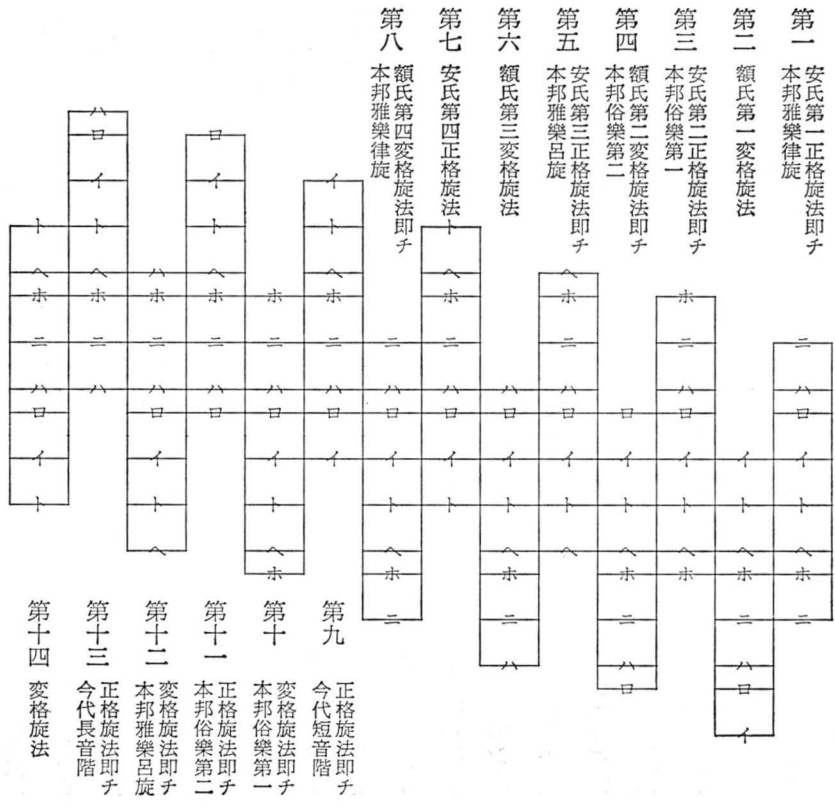
Heu mi- se- ri! quid, ho- mo in- ep - tam

se- que - ris ke ti - ti- am?

通患ニシテ主調音ハアレトモ無キガ如シ蓋シ樂曲ニ主調音ノ不定ナルハナホ三軍ニ主將ナキガ如クニシテ其呂律調ハズ故ニ當時ノ樂曲ハ一モ静止法ニ於テ其宜キヲ得タルモノナシ其情ナホ俗樂ノ主調音ノ自然長音階ノ導音ニ終ルノ宜キヲ得ザルト一般ナリキ然ルニ千五百年代ノ中葉ニ當テ彼ノパレストリナガ出テ天下ニ大名ヲ轟カセシヨリ千五百六十二年トレントノ大會議ニ馴到シ遂ニ其議決ヲ以テ數百年來襲用シタル旧樂曲ヲ一朝ニ禁斷シパ氏ヲ以テ新樂曲ノ撰者ニ任ジ爾後パ氏生ヲ享クル三十有餘年ノ間殆ド一日ノ如ク新樂曲ノ撰定ニ從事シ其撰述スルトコロ啻ニ曲目ノミニシテ數部ノ大卷ヲ成スニ至リマタラランダス、ラツサスハ獨力ヲ以テヨク二千餘曲ヲ撰述シ其他ナニノ兄弟、アネリオ、ガブリーリ、バレンジヨ等ノ如キ非常ノ豪傑輩出シテ各其力ヲ極メ妙ヲ競ヒ自由自在ニ主調音ヲ創用シ遂ニ自然音階ヲ表出シ由テ以テ音樂ノ体面ヲ一新セリ即チ自然音階ハ彼ノセンアンブロースノ第三旋法ニ於テ本位(回)ニ易フルニ變(回)ヲ以テシ第四旋法ニ於テ本位(ハ)ニ易フルニ嬰(ハ)ヲ以テシタルヨリ導キシモノナリトイフ説アリ左ニ掲クル中古用ノ七音竊用十四音階ヲ檢閲セバセン、アンブロースノ音階ヨリ正格旋法ヲ經進シテ現今ノ長短音階ヲ表出シタル所以ノ一端ヲ見ルニ足ルベシ〔下段の図〕

ヘルムホルツニ據レバ希臘ノ「ドリック」「エオリック」「フリージアン」三音階ノ轉化シテ今ノ短音階ト為リシハモンテウエルデノ時ニ創リ第十七世紀ニ至テ完成セリトイヒマタムーア、ハラ等ニ據レバ長短第三音ノ關係ヲ檢出シ(ハ)調自然音階ヲ第一旋法ト爲シ始メテ完全静止法ノ効用ヲ看破セシ者ハザアリノニシテ今代樂ノ大成セシハ第十八世紀ノ中葉ニ在リトイフザアリノハ西紀千五百十九年ウ

七音竊用十四音階ノ圖
ジョン、ハラニ據ル



エニスニ生レ同千五百七十年ノ頃卒シモンテウエルデハ即チ創メテ彼ノ第五度ノ七ノ和絃ヲ豫備セズニ用キタル豪傑ニシテ同千六百年代ノ初ニ屬セリ由是觀之該自然音階ノ表出セシハ西紀千五百五十六年(永祿元)ヨリ同千七百五十六年(寶曆明)ニ至ル間ニ在リ則チ其完成ニ達セシ後ナホ二百年ニ至ラザルモノトス從是西樂ハ日ニ進ミ我

樂ハ否ズ此等ノ事情ヲ考フルモ西樂ハ実ニ近年ニ至ルマデ我樂ト同一ナルモノトイフベシ

印度樂ノ歐洲ニ傳ハリシ轉末ハ大略上述スルガ如シ因テ是ヨリ其マタ本邦ニ渡リシ所以ヲ述フベシ蓋シ「アリヤ」種族ノ一部ハ西方ニ向テ移轉シナホ一部ハ東方ニ向テ故郷ヲ出テシガ印度ノ音樂ヲ支那ニ傳ヘタルハ即チ此東方ニ向テ漂泊シタル者ナルベシ彼ノ支那ノ五聲音階モ印度ヨリ出テ本邦ヘハ更ニ支那ヨリ轉傳セシモノ、如シ方今支那ノ音階ニ歐洲五聲音階ト符合スルモノアリ本邦ニ於テモ亦然リトス是レ其證ナリ且支那ニ於テ最モ古キ樂器ハ笛ニシテ本邦ニ於テ最モ古キ樂器モマタ笛ナリ是レ所謂印度ノ「クリシナ」ヲ拜セシ人民ヨリ傳ハリタル樂器ニシテ而シテ其印度ヨリ支那ニ渡リシハ最モ太古ニ屬シ黃帝ノ頃ハ既ニ世ニ行ハレシモノト信セリ故ニ彼ノ黃帝命伶倫、取竹嶰谿之谷、以生空窾厚鈞者、斷兩節間吹之、以爲黃鐘之宮トイヘル如キハ是レ彼ノ印度傳來ノ笛ヲ模造シタルヲイヘルモノトス何トナレバ帝之ヲ伶倫ニ命シタルハ當時已ニ音樂ヲ業トスルモノアリシ所以ニシテ其竹ヲ印度ニ接スル嶰谿ニ取リタルハ笛ニ適スル竹ノ出所ヲ知レル所以ヲ證シ兩節ノ間ヲ斷リ之ヲ吹キタルハ其製法及ビ使用ノ方法ニ通ジ而シテ其音ヲ以テ黃鐘ノ宮ト爲シタルハ業已ニ黃鐘ノ宮タル音律ヲ熟知セル所以ナレバナリ後マタ印度地方ヨリ笛曲ノ傳ハリタル事ニ就テハ杜氏ノ通典ヲ見ルニ横吹有雙角、即胡樂也、張騫入西域、傳其法於西京、唯得摩訶兜勒一曲、李延年因胡曲、更造新聲二十八解、乘輿以爲武樂トアリ此事マタ律書樂圖等ニモ見エタリ懷竹抄體源鈔等ニハ張騫天竺ニ渡リ初メテ摩訶兜勒ノ一曲ヲ傳フトモ云ヘリ蓋シ張騫ガ月氏ニ使シ十有三年西域諸

國ヲ曆遊シテ歸リシハ資治通鑑ニ據ルニ漢武帝ノ元朔三年ニアリ抑支那ノ音樂ハ唐虞三代ヨリ周室ヲ歷テ漢ニ至ルノ間樂器モ多少其數ヲ増シ且歷代ノ樂ト稱スルモノモアリシヤニ云ヒ成セドモ其実ハ漢ニ至リ第二回印度樂渡來ヲ以テ其中興ノ紀元トス即チ張騫歸朝ノ後何クモナク武帝ガ元狩三年ヲ以テ始メテ樂府ヲ置キ宦者李延年ヲ以テ協律都尉ト爲シ司馬相如等數十人ヲ舉テ詩賦歌章ヲ造爲セシメ以テ音樂ノ振興ヲ謀リシ如キハ誠トニ前代未聞ノ盛舉ト云ベシ後マタ殊ニ明帝ノ時佛法中國ニ入ルヨリ重譯來貢男伎者也其後國子爲沙門、來遊又傳其方音、漢安帝時天竺獻伎等ノ事文獻通考ニ歷載スル如ク益々印度樂渡來ノ大道ヲ聞キ是ニ於テカ遂ニ支那樂ハ漢廷ヲ以テ大成セリト云フモ証言ニアラザルヲ致セリ後漢以後三國晉南北朝等ニ及ブマデハ概ネ漢ノ制ニ倣フ梁ノ武帝ハ頗ル音律ニ達シ自ラ四通ヲ制セシホドノ人物ナレバ音樂ヲ隆興シタルハ言ヲ俟タズ隋文帝ハ開皇ノ初メニ詔ヲ下ダシテ七部樂ヲ置キ即チ天竺樂ヲ其一部樂ト爲シタリ初メテ音樂ヲ雅俗ノ二部ニ分チシモマタ此文帝ノ時ニ在リ唐高祖武德九年ニ太常少卿祖孝孫等ニ詔シテ更ニ雅樂ヲ考定セシム孝孫以爲ラク梁陳ノ樂ハ吳楚ノ聲多ク周齊ノ樂ハ胡虜ノ音多シト是ニ於テ南北ヲ斟酌シ參フルニ古聲ヲ以テシ卒ニ太宗ノ貞觀二年ニ至ルマデニ唐雅樂凡八十四調三十一曲十二和ヲ作ルマタ豫テ協律郎張文收ニ詔シテ孝孫ト同ジク之ヲ修定セシム即チ其六月乙酉孝孫等新樂ヲ奏シ以テ叡聽ニ供シタリ太宗ガ即位ノ初メ群臣ヲ宴シ秦王破陳樂ヲ奏セシ事ハ載テ正史ニアリ爾後モ宴會ニハ必ズ之ヲ用ヒシトソ蓋シ此樂ハ太宗初メ秦王タリシトキ劉武周ヲ破ラレシ軍中ノ作ニ係ルヲ以テ其本ヲ忘レザルヲ示スノ意ニ出テタリ是ヨリ音樂ハ代ヲ逐

テ旺盛ニ赴キ唐室全盛ノ時ニ至テハ内外ノ教坊二千人梨園弟子三百人ニ及ビ其他宜春雲韶ノ諸院及ビ掖庭ノ伎ハ其數ニアヅカラズマタ太常ノ樂工ハ萬餘戸ニ至レリ盛ナリト云ベシ蓋シ支那ノ音樂ハ唐室ヲ以テ極進ノ度ニ達セシモノニシテ其本邦ニ傳ハリシモマタ唐室ヲ以テ殆ド其限リトス

本邦最古ノ樂器トスル笛ハ其傳來甚タ舊シ論者或ハ此笛ヲ以テ秦徐福ガ傳フルトコロナリトナシ歐陽公文集日本刀歌ニ徐福行時書未焚逸書百篇今尚存トアルハ是其證ナリトイヘリ雅樂ノ傳來ハ三韓ノ朝貢以來ニ屬シ三韓ノ朝貢ハ人王十代崇神天皇ノ頃ヨリ始レリ漢書モ已ニ此頃渡來シ爾後彼國ヨリ文學技藝ノ百工ヲ曆朝ニ貢進シタレバ樂人モ其中ニ在リシ事明カナリ蓋シ三韓ノ樂ハ箕子ガ傳フルトコロニシテ印度ノ樂ノ初メテ支那ニ渡リシ後ナホ何クモナク更ニ轉傳セシモノニ係リ却テ其純質ヲ保有セルアルモノ、如シ其本邦ニ渡リシ事ノ明文ヲ國史ニ掲ケタルハ人王十九代允恭天皇紀二四十二年正月戊子天皇崩云々新羅王聞天皇既崩、驚愁之、貢上調船八十艘及種々樂人八十云トアルヲ始トスマタ人王三十代欽明天皇十五年二月百濟ヨリ別ニ勅ヲ奉ジテ樂人德三斤等數人ヲ貢シ且請ニ依テ代ラシムトアリマタ欽明天皇元年秦漢及ヒ諸蕃投化者ヲ檢シ七千五十三戸ヲ諸國ニ編貫セラレシ一事ヲ以テモ業已ニ學藝百工ノ人ノ渡リシハ辨ヲ埃タズシテ知ルベシ百濟人味摩之帰化シテ吳國ニ學習セル伎樂ノ舞ヲ傳ヘタルハ人王十四代推古天皇ノ二十年ニ在リ且欽明天皇十三年佛法我邦ニ渡來セシヨリ百般ノ佛事起リ音樂モ隨テ世ニ行ハレ會マ聖德太子ノ出テ天下ニ令ヲ布キ偏ネク伎樂舞樂ヲ學習セシメ玉ヒシヨリ樂道遂ニ勃興セリ國朝夙ニ音樂ノ効用ヲ看破シ且之ヲ享有

セラレシハ抑此聖德太子ニシテ太子ガ守屋大臣ヲ討タレシトキモ現ニ陪臚ヲ奏シテ其軍ヲ進メラレタリトイヘリ人王四十一代天武天皇紀二十二年春正月云云奏高麗百濟新羅三國樂於庭中云云同四十二代持統天皇紀二七年正月云云漢人等奏踏歌云云トアルハ共ニ雅樂ノ朝廷ニ用キラレシ紀元トス同四十三代文武天皇ノ朝ニ成リシ大寶ノ令ニ歌師歌女師歌人歌女舞師舞生笛生笛工ナドアルヲ伊藤長胤ノ制度通ニコレハ何レモ本國ノ樂師トミエタリト解説セリ因テ考フルニ此等ハ即チ唐三韓等ノ樂家ヲ採用シテ在來ノ歌ニ節ヲ附ケ舞ノ手ヲ撰マシメシ人ヲイヘルモノナラン其文中ニ樂ノ字ノナキヲ以テモ其稱々音樂ト稱スルニ足ラザルモノタル事言ヲ待タザルナリ次ニ叙シテ唐樂師、高麗樂師、百濟樂師、新羅樂師云トアルハ共ニ規律ノ正シキ音樂ヲイヘル事特ニ樂ノ字ヲ加ヘタル一点ヲ以テモ之ヲ斷了スルニ足レリ由是觀之當時ノ音樂ハ殆ド唐高麗百濟及ヒ新羅ノ樂ニ歸セリト云フモ可ナリ且茲ニ笛生笛工ナドノ名ノミ見ユルモマタ笛ノ所謂最古樂器タル所以ニシテ笙簞篳篥琴瑟箏篪羯鼓等ノ如キ諸樂器ハミナ後來ノ輸入ニ係リ當時未ダ之ヲ用キザリシ所以ナルヲ知ルベシ然リ而シテ此ニ所謂唐樂ナルモノハ其傳來ヲ按ズルニ由テ來ルマタ已ニ久シ蓋シ從來我邦ノ文物ハ概ネ之ヲ三韓ニ取リ人王三十二三代ニ至テハ文化頗ル蔚興セリ然ルニ當時三韓ハ兵革相尋キ其文學日ニ衰頽シ而シテ我文學ハ日月ニ上進シ厩戸皇子ノ如キ秀才積學輩出シテ遠ク三韓學者ノ上ニ超過セリ因テ朝廷更ニ道ヲ海外ニ求ム是ニ於テカ遣隋唐使ノ擧アリ則チ推古天皇十五年始メテ小野妹子ヲ隨國ニ派遣セラレシヨリ爾後遣隋唐正副使學生學僧等陸續往來シ制度文物凡百ノ事業皆師法ヲ彼ニ取レリ是レ隋唐ノ樂マタ我邦ニ渡來セ

ル所以ニシテ即チ我邦ノ音樂史上一大紀元ヲ開キシモノナリ但シ此際ニ渡來セル各樂曲器樂士ノ名籍、傳統ノ由緒等ハ煩擾ヲ厭ヒ之ヲ省略ス其詳細ハ載テ體源鈔、樂家錄、樂道類聚等ニ在リ就テ見ルベシ然リ而シテ世ニ所謂雅樂中林邑亂声、菩薩、迦陵頻、胡飲酒、蘇莫者、拔頭、陪臚、輪鼓禪脫、劍氣禪脫、河水樂、青海波、安摩、扶南、蘇合、河南浦等ノ如キハマタ皆天竺傳來ノ樂ナリ是レ即チ印度樂ノ支那ヲ歷テ日本ニ渡レル史傳ノ歷然タルモノトス且其安摩ノ如キハ笛ノミヲ以テ演奏スルトコロニシテ印度ニ於テモマタ殊ニ古樂ニ屬スルヲ知ルベシ偕斯ノ如ク唐樂等頻リニ渡來セシヨリ朝廷ノ大儀ハ云ニ及バズ堂塔ノ開眼供養其他民間ノ小儀ニ至ルマデ舉テ斯樂ヲ用フルノ風俗ヲ成セリ其情際ハ江家次第及ビ其他ノ家記ヲ見テモ之ヲ概知スルニ足レリ寧樂ノ朝ニ於テハ人王四十六代聖武天皇佛道ニ由テ之ヲ大用セラレシヲ始トシ平安ニ遷都ノ後モ人王五十二代嵯峨天皇同五十四代仁明天皇ノ兩主殊ニ音樂ヲ好マセ玉ヒ就中仁明天皇ハ斯道ニ堪能ニオハシマセシカバ親ラ樂曲ヲモ作ラセ玉ヒシホドニテ是ヨリ歷代ノ聖主ハ言ニ及ハズ公卿以下縉紳等ニ至ルマテ苟モ朝廷ノ上ニ趨走スル者ハ大小トナク皆斯道ニ通ゼザルナキニ至レリ豈盛ンナリト云ハザルベケンヤ然ルニ人王五十九代宇多天皇ノ寬平六七年唐室ノ衰亂ニ際シ學生等留止スルヲ得ズ因テ菅原道真奏シテ遣唐使ヲ罷メシカバ留學ノ事等遂ニ廢止ニ屬セリ抑我邦中古文運ノ衰頹ヲ致セシハ其兆ヲ茲ニ發ス乃チ音樂モマタコ、ニ於テ其傳來ノ途ヲ失セリ故ニ雅樂ノ命脈ハ既ニ是時ニ絶エタリト云モ可ナリ然レドモ當時本國傳習以來ノ諸豪モナホ赫々タルヲ以テ會々延喜天曆ノ隆盛ヲ致スヲ得シモ雅樂ノ全体ニ就テ之ヲ云ヘバ其此等ハ僅カ

ニ其餘涎ヲ引キタルニ外ナラザルベシ然リ而シテ一廢一興ハ事物ノ常理ニシテ新異ヲ好ムハ人情ノ自然ナレバ音樂ノ外ヨリ入ル途絶エテ後ハ人心ノ方向一轉シマタ既ニ内國ニ崩生セルモノヲ採テ之ヲ編纂修定スルノ点ニ向ヘリ是ニ於テカ神樂催馬樂東遊等起ル俗樂モマタ是レ雅樂ノ沈底ニ乘シテ起ルモノトス蓋シ神樂ハ寧樂ノ朝ニモ豐樂院ノ中ナル清暑堂ニ於テ臨時御宴ノ際執行セラレシ事モアリシガ朝廷ノ大儀ニ例用セララル、ニ至リシハ人王六十六代一條天皇ノ時ニ始レリ神樂歌ハ中右記ニ據レバ天仁人王七十四代鳥羽天皇元年元年ノ撰定ニ係ルヲ最古トストイヘリ又催馬樂ハ讀教訓抄ニ拠レバ催馬樂トイフ曲ヨリ出デタリトイフ其名ハ前張ヨリ起ルトモイヒ我駒ヨリ出ルトモイフ者アレドモ皆信ズルニ足ラズ催馬樂ハモト薩摩ノ催馬樂村ニ住ミシ人民ヨリ起リシトノ説或ハ中レリトス其史乘ニ見エタルハ三代實錄貞觀人王四十六代清和天皇元年元年ノ條ニ尚侍廣井女王ノ事ヲ述ベテ特ニ催馬樂ヲ善クストアルヲ始トス然レトモ今傳フル所ノ譜ハ人王六十四五代圓融花山兩朝ノ間ニ一條左大臣雅信公ノ撰定ニ係ルトイヘリ朗詠ハ延喜ノ頃ヨリ起リ東遊ハ貞觀三年三月東大寺大佛供養ノ條ニ東舞トアルヲ始ト為シ東遊又ハ駿河舞ナドト唱ヘテ世ニ行ハル、ニ至リシハ遙カニ後ノ事ナリトゾ彼遣唐使廢絶ノ後ハ朝廷ノ樂モ此ノ如キ雜駁ヲ極メタリ之ヲ要スルニ雅樂ハ次第ニ興起進往ノ力竭キ維持保存ノ一点ニ歸着シ降りテ戰國亂離ノ世ト為リテハ悉滅セザルヲ幸トシ委靡今日ニ至ルハ豈マタ斯道ニ於テ遺憾ノ極ト云ハザルベケンヤ

俗樂モマタ印度傳來ノ雜樂ヨリ変出セルモノニテ其勃興セシ所以ハ雅樂ノ衰退蝟縮セルト其勢力上流士人ニ止リテ下民ニ及バザルトニ歸因セリ然リ而シテ今ノ所謂俗樂ハ其種固ヨリ多雜ナリトイヘド

モ基本ヲ類推スルニ概ネ皆彼ノ猿樂雜戲ニ出テタルモノ、如シ猿樂ハ散樂ノ假字ニテマタ散更トモイヘリ即チ文獻通考ニ散樂雜戲多幻術、皆出西域、始於善幻人至中國、後漢安帝時、自是歷代有之トアル是ナリ其支那ヨリ我邦ニ傳ハリシハ遣唐使以來ニ在リ但シ人王六十二代村上天皇御製ノ散樂策ニハ島瀛來朝而有解頤之觀ト書セ玉ヒテ散樂ハ鳴瀝人來朝シテ始メテ之ヲ演セシヤニ見ユレドモ是レ恐ラクハ舊史ノ誤ヲウケテ書セ玉ヘルニヤ鳴瀝人來朝ノ事ハイカバト嬉遊笑覽ニ見エタリ本邦ニ於テ其史籍ニ頭ハレタルハ三代實錄貞觀三年六月廿八日ノ條ニ有雜伎散樂透撞咒擲云云之戲トアルヲ始トシ同書元慶四年庚子秋七月廿九日ノ條ニモマタ右近衛內藏富繼長尾米繼善散樂令人大笑云トアリ然レバ散樂ハ清和天皇ノ時頃ヨリ始レリトス然レドモ宇多天皇ノ御宇即チ廢遣唐使以後ハ猿樂モマタ人心ノ風潮ニ沿フテ一變シ遂ニ新猿樂ノ名アリ藤原明衡一條天皇ヨリ後冷泉天皇マテ五朝ニ係ル新猿樂記ヲ以テ知ルベシ此新猿樂中ニハ田植ノ時農夫ノ勞ヲ慰ムル任方ノ曲ナドモ出来シ之ヲ名ヅケテ田樂トイヒシガ後其一種ノ歌舞ト為リシハ人王七十三代堀河天皇ノ時ニ在リ永長元年夏洛陽田樂ノ流行セシ事ハ大江匡房ノ洛陽田樂記ニ詳ナリ是ヨリ田樂頻リニ流行シ猿樂ハ一旦衰ヘタリ田樂ハ其後本座新座ト分レ互ニ其業ヲ競ヘリ太平記ニ人王九十六代後醍醐天皇ノ元弘年間田樂一層洛中ニ流行シ貴賤之ヲ玩フ北條高時之ヲ聞キ新座本座ノ田樂ヲ鎌倉ニ呼下シ興行セシメタリ已ニシテ北條滅ヒ南北ノ乱トナリテモ足利尊氏マタ甚ダ之ヲ好メリ貞和五年十月十一日四條橋ヲ架セントシテ勸進ノタメニ新座本座ノ田樂ヲ合セテ競能ヲ四條河原ニ興行ス攝錄大臣將軍ヲ始メ之ニ臨ミ朝野群衆ヲ極ム此時簞亂、拍子、刀玉等ノ曲終リタル後

新座ノ樂屋ヨリ新工夫ヲ設ケテ猿樂ヲ出セシニ群衆皆興ヲ催シ二百四十九間ノ棧敷倒レテ死傷多カリシト云フ是レ猿樂ノ再變シテ世ニ出テタルモノニシテ今ノ猿樂ノ正シキ書ニ見エタル始トス然リ而シテ此前後ハ支那ノ雜劇ノ再ヒ我邦ニ入來リシ時代ニテ新井白石ノ俳優考ニモ云ヘルアリ鎌倉ノ末室町ノ始ニハ漸ク漢土ヘ往來セル人多ケレバ彼元朝ニテ盛行ハレシ傳奇雜劇ナド云フ態ヲ見聞シヤガテ田樂猿樂ノ輩ノ古ヘニ有シ事ノ悦ブベク恐ルベク樂シムベク驚クベキ事ナドヲ謡ヒモノ、詞ニ作りナシテ歌ヒ舞ケル也此レ彼ノ雜樂散更ノ餘風ナルガ一變シテ傳奇雜劇ノ體ニ倣ヘルハ先ツ田樂ニ始レルナルベシトイヘリ以テ徵スベシ足利ノ始ヨリ猿樂ノ能マタ漸ク行ハレ應永文安ノ頃マデハ田樂ト對行ノサマナリシガ終ニ猿樂盛ニナリテ田樂ハ廢レタリ足利義滿ノ時ニ伊賀國服部某ガ猿樂ヲ能スト聞キ其頃ニ始メテ置キシ童坊ノ役ニカカヘ觀阿彌ト名乗ラセ猿樂ヲ謡ヒ舞ハセテ之ヲ賞玩セリ此觀阿彌ハ即チ觀世流謡ノ遠祖ナリ保生流ハマタ比觀世ヨリ出テタリマタ觀阿彌ノ頃竹田ノ住人禪竹トイフ者アリ猿樂ニ堪能ニシテ且和漢ノ才學ニ長シ新曲ノ作ヲ以テ業トセリ此禪竹ハ猿樂ノ舊家田備ノ後ヲ繼興ス之ヲ金春トス金剛ハマタ此金春流ヨリ分出セリ且狂言モマタ皆田樂猿樂ニ附屬シタル能狂言ヨリ出テタリ今ノ長唄ハマタ重モニ能狂言ヨリ変出セルモノナリ元和頃杵屋勘五郎トイヘル者アリマタ猿若勘五郎トモイヘリ猿若ハ猿樂ヨリ出テタル稱ナリ即チ此勘五郎狂言師ニシテ小唄ヲ善クシ一派ヲ開キタリ之ヲ長唄ノ元祖トス杵屋ハナホ長唄ヲ以テ業トセリ其枝葉マタ少シトセズマタ中古琵琶法師ナルモノアリシガ琵琶法師ノ物語ハ明衡ノ新猿樂記中ニ在ル曲名ノ一ニシテ其先ハ即チ新猿樂ヨリ出デ

タリ而シテ此琵琶法師ノ物語ハ彼朝ニ之ヲ陶真トイヘリ堯山堂外記ニ杭州男女瞽者、多學琵琶、喝古小説平話、以覓衣服謂之陶真トアル即是ナリ琵琶ハモト印度ノ古樂器ニシテ其原語ニ之ヲ「ビナ」トイヘルモノヨリ出ツ支那ノ書ニ琵琶ハ胡中ニ出ルトアルハ即チ其印度ヨリ渡リシヲイヘルナリ琵琶ノ我邦ニ渡リシハ承和ノ遣唐使藤原貞敏ガ唐ノ廉承武ニ得テ傳フルヲ始メトス偕琵琶法師ノ物語ノ一變セシモノハ平家ナリ平家ハ人王八十二代後鳥羽天皇ノ時信濃前司行長入道源平盛衰記ヨリ撰ミテ平家物語ヲ作り之ヲ琵琶法師生佛ニ教ヘ語ラセケルニ生佛ノ平家ヲ語ル事他ニ勝絶セシニヤ後ハ平家ノミ流行シ琵琶法師ノ物語ヲ平家ト呼做スニ至リシヲ以テ其起源トス平家ノマタ一變セシモノハ浄瑠璃ナリ浄瑠璃ハ平家物語十二段ニ擬シテ浄瑠璃御前十二段草子ト名ツケタル物語ヲ濫觴トス故ニ浄瑠璃ハ語ルトイヒ又浄瑠璃節ト云ナリ浄瑠璃ノ作者ハ通俗ニ織田信長ノ侍女小野阿通ナリトスレドモ此事ハ還魂紙料ニモ論ズル如ク妄説ニシテ享祿四年ノ宗長日記天文九年ノ守武千句等ニ抛リテモ其起リハ概ネ足利義晴ノ頃ナルベシ浄瑠璃ハ琵琶法師瀧野澤住ヨリ興リ目貫屋長三郎薩摩浄雲等之ニ嗣キ後ニ薩摩、長門、虎屋、左内等ニ分レ薩摩ハ更ニ淡路大薩摩、下リ薩摩、土佐等ノ數家ト為リ長門ハ半太夫河東等ニ分レ虎屋ハ伊勢島、角太夫喜太夫播摩等ニ分レ播摩ヨリ義太夫ヲ出シ角太夫ヨリ文彌、一中、宮古路等ヲ出シ宮古路ヨリ新内、常盤津ヲ出シ常盤津ヨリ富本、富本ヨリ清元ヲ出ス等其枝葉末流毛舉ニ違アラズ又佛家ニ梵唄声明等アリ梵唄声明ハ體源鈔樂道類聚等ヲ見ルニ承和四年六月十七日慈覺大師ガ唐ノ竹林寺ニ入テ引声念佛ヲ法道和尚ヨリ傳受セシニ大師ノ音不足ニシテ其音曲ヲ得ガタク故

ニ笛ヲ以テ之ヲ渋谷鳥ニ合セテ習得セリトアリ是即チト梵唄声明ノ傳リシ由来ナリ然レトモ此梵唄声明モマタ印度傳來ノモノニシテ其由来ハ釋氏要覽、法苑珠林、笈埃隨筆等ニ詳カナリ引声阿彌陀經跋ニ云ク引声阿彌陀經者在昔慈覺大師於五臺山傳此曲節云云ト今ノ声明ハ更ニ是ヨリ起リ其流派種々ニ分ル其明細ハ魚山叢芬集ニ見ユ声明ハ即チ後世ノ歌念佛、歌說經、念佛踊、說經、與八郎歌念佛、等ノ遠源ナリ念佛踊ト能狂言トノ婚シテ生セシハ歌舞妓ナリ歌舞妓ハ天正ノ頃京師ニ於テ出雲ノ神子阿國ガ為セシヲ以テ始トス阿國諸國ヲ徘徊シ江戸ニ來リテ興行セシハ慶長十一年ナリトイヘリ落穂集ニ抛レハ江戸町割ノ始茨原町ニ歌舞妓ヲ願出デ開キタリトイフ之ヲ江戸芝居ノ權輿トス已ニシテ元和ノ頃歌舞妓ヲ停止セラル尋テ猿若彦作若衆歌舞妓ヲ願出テ之ヲ今ノ中橋廣小路辺ニ開クマタ寛永九年頃泉州堺ノ若衆歌舞妓師村山又三郎江戸ニ來リテ芝居ヲ堺町ニ始ム此頃ヨリ猿若衆モ堺町ニ移レリ江戸浄瑠璃ノ元祖薩摩浄雲モマタ泉州堺ヨリ江戸ニ來リ一派ヲ開キ寛永ノ頃堺町ニ操座ヲ始メ猿若村山兩座ノ歌舞妓及ヒ說經太夫ノ操座ト繁昌ヲ競フ蓋シ操座ハ古ノ所謂傀儡子ニシテ傀儡子ハ大江匡房ノ傀儡子記ニ詳カナリ鎌倉足利ノ頃モ世ニ行ハレタリ是レマタ彼ノ散樂雜戲ニ出ゾ浄瑠璃ハ初メ一番ヅノモノ多カリシガ薩摩浄雲始メテ二番三番續ノ浄瑠璃ヲ作ルトイヘリ天神記ハ延享三年八月成リ忠臣藏ハ寛延元年ニ成ル要スルニ十有餘段モ續キタル長物ハ多ク此時代ニ出テタリ浄瑠璃ノ作者モ始メハ井原西鶴ノ如キ俳諧師流ナリシガ近松門左衛門出テ竹本義太夫ト相投シ陸續名作ヲ以テ相著ハルヽヨリ遂ニ局面ヲ一變セリ且浄瑠璃ハ始メ皆操ニ用ヒシモノナリシガ元祿享保ノ頃ヨリ歌舞妓俳優モ

本色ノ踊ノミヲ専門トセズ人形ノ仕形ヲ模シテ段續キノ芝居ヲ為シ
 旧風ヲ一變シテ今ノ芝居ト為リタリ始メテ浄瑠璃ニ説経歌念佛ヲ附
 和シテ漸々節奏ヲ易ヘタルハ江都創業ノ頃ニシテマタ之ヲ三味線ニ
 合セテ曲調ヲ進メタルハ瀧野澤住ニ始レリトスレドモ其専ラ流行セ
 シハ寛永以後ニアリ長唄ノ流行シタルモ喜三郎ガ之ヲ三味線ニ合セ
 タルモマタ此頃ヨリ始レリトス三味線ハ通俗ニ琉球ヨリ渡レリトス
 トイヘドモ嬉遊笑覽ニハ貞宜ガ浅草舟行ノ記ニ三線ハ蛇皮小弓ハ
 「ラヘイカ」トイヘルモ誤レリ按スルニ「ラヘイカ」ハ「バライカ」
 ノ誤ニテ即チ三絃ノ名ナリ魯細匝ニテシカ云魯細匝ハ爰ニ古ク渡リ
 来シ國ナラネドモ是ハ「ラテン」語ナルニヤ歐羅巴洲ノ通称ト見エ
 タリ云云トアリ由是觀之三味線ハ往時和蘭葡萄牙等ノ通商ガ舶載ス
 ルトコロニアラザルカ胡弓月琴等モマタミナ琉球ヨリ渡来トスイヘ
 リ太宰獨語絲竹初心集藝苑日涉等ヲ見ルベシ箏曲大意抄奥書ニ據レ
 バ箏モ或者ノ筑紫ニ於テ異朝ノ人ヨリ傳ヘシヲ筑後國善導寺ノ僧之
 ヲ得テ世ニ弘メシモノニテ寛永ノ末ニ至リ八橋檢校越天楽ノ「ふき
 といふは草の名」ノ歌ヲ本ト為シ組ト為シタルヨリ大ニ世ニ行ハル
 ト云蓋シ以上ニ縷述スルトコロハ音楽源流ノ一斑ニシテ古今沿革ノ
 全豹ヲトスルニ足ラズ然リトイヘドモ彼此ノ音楽ノ其源ヲ印度ニ發
 スル所以ハ古来歐洲ニ行ハレシ音楽ト我邦ニ行ハル、音階ト相符合
 スルアル一事ヲ以テモ既ニ之ヲ徴スルニ足レリ況ンヤ其統緒歴然觀
 ルベキモノアルヲヤ

〔音監經伺書類上下、音楽取調成績申報書〕明治十七年

〔手書き〕

(六) 「明治頌撰定ノ事」

明治頌ノ撰定ハ始メ國歌ノ資料ヲ撰定スルノ旨趣ニ出デタリ其命
 ノ下リシハ實ニ明治十五年一月ナリ抑國歌ノ事タル聖世ノ大典ニシ
 テ其與カルトコロ至重至大ナレバ妄リニ断了スベカラザルモノナル
 ヲ以テ汎ク海外各國々歌及ヒ其史傳等ニ據テ彼此參互深ク之ヲ研究
 セシニ彼國々歌中ニハ人心ノ向背ヲ決シ邦國ノ禍福ニ與リ億兆ノ幸
 否治道ノ進退ヲ来スニ至リシモノ尠シトセズ是ヲ以テ先ツ尊王愛國
 ノ大義ニ基キ汎ク古今ヲ斟酌シ明治聖世ノ隆德ヲ發揚スルヲ以テ主
 義ト為シ得ルトコロノ歌按六篇ヲ以テ其三月中之ヲ文部卿ニ呈シ其
 体裁内定ヲ請ヒシニ果シテ本掛ノ所見ニ違ハズ右ノ体裁ヲ以テ更ニ
 一層精選シ速カニ撰定ノ功ヲ竣ヘ稟申スベキノ旨ヲ得タリ是ニ於テ
 乎國歌資料撰定ノ体裁裁決シ更ニ規模ヲ張り上ハ歷代ノ天業ヨリ下
 ハ勤王愛國ノ偉勲ニ至ルマデ普ネク古今ノ故事故實ヲ綜核シ國體ノ
 在ルトコロヲ研究シ且本邦和歌ノ作法雅俗樂ノ規則及ビ西樂ノ理法
 ヲ商量シ尊王愛國ノ大義ニ基キ拮据黽勉サラニ得ルトコロノ歌按四
 篇ヲ以テ次ク四月之ヲ上申シタリキ夫レ國歌ハ上述スル如ク其關係
 至大至重ノモノナルヲ以テ我邦音樂ノ現情ニ在リテハ其資料ヲ撰定
 スルノ難キ事殆ト云フベカラズ歌作高キニ勤ムレバ社會一般ニ適シ
 難キ恐レアリ低キニ着意スレバ野鄙ニ失スルノ患アリ純然タル和風
 ニ拘泥スレバ外交日新ノ今日ニ適セザルノ恐アリ妄リニ外風ニ模ス
 レバ國歌タルノ本体ヲ謬ルノ患アリ歌詞ニ得ルトコロアルモ曲調ニ
 欠クトコロアリ曲調ニ得ルモ歌詞ニ欠クトコロアリ豈之ヲ難シト云
 ハザルベケンヤ本按ハ方今ナホ裁定中ニ属スルヲ以テ目下其何如ヲ
 開報スル能ハザルハ遺憾ナリト云ベシ茲ニ從來取調タル所ノ歐米諸